

ひろば大代

NO.197

大代公民館

「河内長野市自慢」

「花の文化園で心の潤いを」

関西高山会事務局長 中本 弘



私の家から歩いて約三十分の所に大阪府立花の文化園がある。

その面積は約一ヘクタール。甲子園球場の約三倍の広大な敷地に花壇、バラ園、梅園、大温室があり、四季折々の花を咲かせる。

土・日・祝日の休日に散歩に手頃な場所のために私一人でもまた家内と一緒に出かけ、四季折々の花を観てストレス解消、または心の潤いの場としている。入場料は一人五五〇円で若干高いかなと思うが、一日中花との触れ合いの場を与えてくれる。

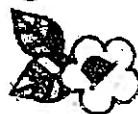
同文化園に入場すると装飾花壇に度肝を抜かれる。十月はサルビアの花が正面入り口一ばいに咲き、その色も赤黄、紫とこんなに多くの色があったかと驚かされる。

次にバラ園には百三十種二千三百株のバラが咲き誇り、こんなに多くの種類があるのかとバラの花の前でしばし足を止め、ながめた。

最後に大温室、熱帯、温帯そして寒帯地方に咲く花を一堂に集め、目を楽しませる。いながら世界の花を見せてくれる花の博物館である。

特に花を好きな方には、一日中飽きさせない場所であり、また花について素人の私にとっても興味深い場所といえる。その設置目的は「花と人との関わりを理解する場」とのこと。花と触れ合いを通じて自然体で人生を生き抜きたいものである。

お盆帰省三題 (その一)



四十年振りの高山登山

東京石見高山会 松野 広

久し振りの帰省、このたびもまた旧友松島賢蔵さん一家のご厚意に甘え八日間お世話になった。

その名も大代高山会、町民あげての協力によって整備された高山登山道。

体力に合わせて飯谷コースと山田コースがありまことに有り難い。

八月十二日松島賢蔵さん、長男の成和さんと三人で思い立ったが吉日、賢蔵さんのおにぎりを持って朝八時三十分飯谷コース山辺神社に車をおいて登り始めた。

賢蔵さんの健脚には驚いた。あの険しい尾根道をトコトコ登って行く。

私は「待つて、待つて」と言いながら五分ずつ四回休んだ。それでも一時間十分で頂上に着いた。まさかこんなに早く登れるとは想像もしなかった。

標識が付けられ整備されているお陰である。吹き出した汗が山頂の風に心地よい。一服しながら私は今から四十年前のことを思い出していた。

大代中学校の山内典夫先生が「松野君、若い者がお盆にぶらぶらしていてもしょうがない、一つ今から高山に登って見ようや」と言う呼びかけであった。早速私は山下友一(上市)、山口昭夫(植松)、山根洋子(樗)、竹間勝枝(八反田)の面々に声をかけ六人が集った。高山は皆初めてである。さて登山するにしてもキャンプする

にしても道具も装備も何もない。洗い米五合、野菜、鍋、ヤカン、ローソク三本、困ったことに水筒がない。窮すれば遭ず、病気の時の水枕二ヶを代用そしてテントはタバコの苗床の温床用のもの、破れムシロ二枚、これを竹おこと縄で背負い中学校を昼すぎ出発山辺神社より登り始めたのはもう二時近くであった。

しかしそこからが大変だった。道なき道をただ上へ上へと熊笹を木こり鎌で切りつけながらジグザグ行進。大砲岩の真下でひと休みした時はもう四時を回っていた。まだ四号目位か、皆んな無口になった。頂上に着いた時は日も落ち夕闇せまる七時頃であった。

それから休む間もなく、背丈以上もある笹や立ち木を切り倒し平場を作りテントを張った。さあ今度は夕食の支度、女性二人がよく頑張った。ローソク三本を火種に生木を燃やし、御飯とみそ汁、お茶まで沸かす大活躍。それが功を奏してか、結婚後お二人は立派に「かまど」を守り、主婦業は百点満点で銀婚式にはご主人より感謝状を頂いたとか、豪華副賞が楽しみとか、京

京スズメの噂がしきり。

空腹を満たすと丸太で組んだ展望台に上った。一瞬眼下の日本海に息を呑んだ。まるで真珠を散りばめたような漁火、空はスパンコールのような満天の星。いつしか島根県民歌、青い山脈上海帰りのリル、放歌高吟青春の歌声は夜の更けるまで続いた。祖式の矢滝の進駐軍のサーチライトが二十秒おき位にピカー、ピカーと光っていた。

朝六時頃テントを出た。真綿のような雲海、峰々が墨絵のように二重三重と濃淡をつけながら浮かんで来る。麓の方から牛が「モウー」と一声、山容の原始美にひたりながら夜露で濡れたテントをたたみ、一等三角点を確認し山田コースへと下山に就いた。遠い日の思い出である。

今また賢蔵さん親子で立つ高山の頂上、登山帳にサインを済ませ、八〇八米の標識を入れて記念の写真を撮った今年生まれのウグイスがつかない声で木々の小枝を揺すっていた。

久方に登りし大江高山の

山頂に結ぶ友と吾の影

時代は激しく移っても、ふる里に仰

ぎ見る山があり、昔を語る人があり、共に苦しんだ友がいる。帰りたい、会いたい。郷愁とはこうした愚かしい憧標をさして言うのではないでしようか大代の皆さんありがとう……。

(その二、三は次回に掲載予定)

高山登山に想う

大森町 吉岡 寛

昨年に続いて今年も高山に登ることができました。

この地方のどこからでもよく見える大江高山。まわりの山々の中にひときわ高くテンと構えたその姿は雄大ですふだんよく見ているのになかなか登る機会のないこの山。一度登ってみたいとかねてから抱いていた夢がはじめて叶った去年。すっかり大江高山のとりこになってしまいました。

ことは十一月三日、近郊の人たちが集い一列になって延々山に登るさまは、まさに参加者のつながりを表しているようでした。

「済みません」と挨拶して前に出る者、前に出る者に快く道を譲る者、楽



しい会話を交わしながら共に歩む者、息をはずませ遅れそうになる者を察し合って登る者、美しい友情と共同の世界です。私たちの社会はいつもこうありたいと思います。

それにしても山の精はこんなにまで私たち人間を浄化する力を持っているのですね。近代化され、あまりにも便利になった今日の社会ではややもすると人と人とのつながりを見失ってしまっているのです。高山への登山はかなり苦しいものですが、その反面人びとがその本性にかえりお互いを扶け合うすばらしい体験の場でもあります。

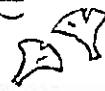
ことしは大森からも十二名参加させていただきました。そのうちの小中学生たち四名はトップグループで登りました。年配の数はしんがりグループながら落伍者もなく八〇メートルの山頂にたどり着きました。頂上で案じながら待っていた者は思わず拍手をしました。

頂きで頂いたお弁当のうまかったこと。そして紅葉の美しい樹林を一同無事に下山できたこと。ことしの良い思い出がまたひとつ増えました。

企画し万全の手配をして下さった大代公民館、大代町の皆さんありがとうございます。特にあれほどに長い道に清掃整備をして下さった世話人の皆さまに心からお礼を申し上げます。こうした蔭の支えが大代の町づくりのすこい力になっているのだなと痛感いたしました。ほんとうにありがとうございます。

紅葉の大江高山登山紀行 (三)

大田市 原田萬里



文化の日、空は薄曇色の雲が広がりやがて雨が降るのではないかと思わせる今朝の天気である。

出雲市の原田仏壇店で買った鈴を着け七時半に家を出る。今日は大代公民館、大代連合自治会、大家郵便局、大代体育協会の共催で、大江高山に挑戦する健康ウォークの日である。

集合場所に向かう私を後ろから来た車が拾ってくれた。この人も登山のため長久町から来た人であった。八時過ぎから山田側登山口の人々が

集まりだした。八時半過ぎから健康ウォークのセレモニーが始まる。予約してあったであろう弁当が配られ、大きな集団が崩れだしようごめく、登山開始である。今日の参加者は百五十人ほどのことである。

林の中を通り抜けるといよいよ急な山道となる。歩行速度も次第に緩んで遂には渋滞してしまうこともしばしばとなる。(富士山のご来光を仰ぐにも九合目付近から渋滞して半歩踏み出したまま何十分も動けないことがあると聞いたことがある。)登山者自らのルールか、先を越す人はない。隊列の動き出すのを辛抱強く待つのである。

高度が高くなるにつれてお互いの言葉が消え入るようになる。下着と肌の間に汗がながれる。

中間点の休憩地付近で後ろを振り返ると、幼児を背負った母親の姿が見える。その後には小さな男の子の手を引きながら登る父親の姿もある。おそらく一家総出の登山であらう。

吹く風は冬型で木の梢を鳴らし、色づいた木の葉を散らさん勢いである。頂上に到達すると先着の人々は既に弁

当を広げている。栗の太い幹が数本横たわっている。過日道を切り開いた人たちの労力によって、眺望がよくなるように切られたものであろう。あの群青色のトリカブトも共に切り払われていた。

今日ばかりは頂上銀座という言葉が当てはまるような賑わいで、腰を下ろす場所を探すのにも苦勞するほどである。

それにしても今日は寒い、リュックに忍ばせておいた合羽を重ねてもなお体の震えが止まらない。手がかじかんでくる。それでも頂上に立った人々の顔には満足そうな微笑みが浮かんでいた。

ちなみに山田側登山口から頂上までの歩数は一万一千歩であった。

また登山道に立つ距離案内板には次のようなエピソードが秘められていたのである。

それは、高山会の人々が手分けをして、頂上から測縄で測定されたものであると聞き、改めて郷土愛の心に触れる思いがした。

高山登山同行の記

江津市 岩崎正行

私は去る十一月三日文化の日、公民館主催の大江高山に同行させてもらった。

私は昭和十五年六月初夏のある日、高山からの日の出と沈む夕日を一日で両方見た。そのとき赤々とした空の景色のすばらしさに憧れた山です。このとき登山家の志しが芽生え高山に登ろうと思った。

しかし子供のことで高山が祖式近くにあることだけは分かったが、どこを通過して行くのかわからない。調べる方法や登山用品等の知識は全く無かった小学校卒業後、就職、軍隊、終戦後は再就職等多忙な日々を過ごす内、いつか立志の高山登山の事は忘れてしまっていた。最初に高山頂上に立ったのは立志以来、五十三年を経過した平成五年五月末頃だった。

見方を変えてみれば、自宅から高山頂上まで約三十六キロの道程を五十三

年かけて登ったことになる。この思い出深い高山に、大代の皆様に同行し登山すること一生のよき思い出になるであらう。

感激の思い出に最愛の亡妻を連れて登ることにし、白シャツの前後に同行二人と書き懐には写真も入れた。

朝七時頃出発し約三十二キロ余りの山田集合場所に向かい、途中の大家の八幡宮に参拝し登山者全員の安全祈願をした。集合場所に到着したのは八時頃で私が二人目で、町外の私にも井当等の接待を受け感謝の念でいっぱいだ。そして皆様に混って山へ向かって出発したが、天候は曇りであった。登山の途中一人の老人が度々休んでは登っておられたので、私はこの人に付添って登ることにした。

この人は武田さんと言われた。約五年前大代公民館からもらった案内図に武田さんの家が目印に書いてあったのを思い出した。その武田さんで何か不思議な縁があるような気がした。後からの登山者を先にやり一番後になったようだ。と思ったら毛利さんと聞いた気がするが登ってこられ、一緒に同行

するとのことでした。二人なら心強いと思つた。一步一步と踏みしめ山田側頂上近くの広場までたどり着いた時、武田さんは「ここから引き返す」と言われた。私達は皆さんの待つ頂上まで何んとか連れて登山させてあげたかったが「ここまで登れたので嬉しい」と言い、下山の意思が固いので私達は袂を分かち別れた。無事下山される事を祈念しながら頂上へと向かう。

皆さんとは相当遅れたが別に後悔はなく、登山家として、人として当然の事をしたまで。「袖振れあうも多少の縁とか」この言葉をかみしめて。

やっと頂上に着いた時、下山の準備をしている人もあった。ほとんど食事を終つた人もあった。武田さん引き返しの報告をした後、弁当を開き缶ビールを飲んだ。昼食を終り亡妻の写真を両手に持ち大田の方に記念写真を撮ってもらつた。皆さんと会話をする暇も休む暇もなく皆さんに続いて下山することにした。

下山の途中、不思議な人に出会い会話をすることができた。それは、私の隣に住んでいた大家出身の横手勇様（現

在は都野津町在住）の兄さんでした。

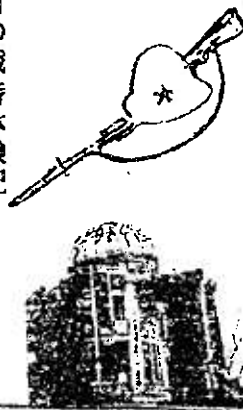
また道路に出てから手折つた木の枝を持っておられた二人の婦人に「収穫がありませんか」と声を掛けたらその一人が横手さんの兄さんの奥様だとわかり驚いた。何んの縁か因果が直接声を掛け合つた二人の方。私この大代の地に数々の縁があるように思う。他に二人三人知り合つて会話することが出来ました。私は知らぬ土地で知らぬ人にふれあいで出会い、会話を交わす事ができるのを最大の夢と希望しておりますが高山登山に参加させてもらい、数々の収穫を得たような気持ちがあります。皆さんの暖かいお心づかいによる賜と感謝致しております。

この大代の町に立っている「思いやりみちて明るい町づくり」の看板を通過する度に見て、何んとすばらしい町であろうかと思ううちに大代の町をこよなく愛するようになったのです。思ひ出の高山と共に。大代町の皆さんご自愛の上町の発展に頑張つて下さい。皆さんのご多幸をお祈り申し上げます。私の信念は「山を愛し、自然を愛しすべての人々を愛す」です。

戦時体験記

「若き日の戦時体験記」

植松 窪田 忠



本土の戦線が近づきつつあった昭和二十年に召集を受け、静岡県浜松市の三方が原と言う所にあつた航測連隊（航空通信）に入隊、隣接して二つの大きな飛行場がありました。多くの方に村境まで送つて頂き、いつまでたつても手が振られている姿に感激、皆のためにも頑張らなくてはと決意を新たにしました。

黒松駅まで歩き列車に乗つたのが三月末で十九才の時です。

小さい時から徹底した軍国主義教育を受けて殉皇の大義を信じ、入隊した時は天皇陛下のため、国のため決して生きて還つてはいけなふと思つていましたから、駅で母が人目を避け小さい声で「死なん様に」と話しかけた時、

これに反論し、なぜ分かってくれないと思ったのでしよう、これが最後と思つて目をうるませる母の姿を覚えています。

列車で二十余時間、この間軍人勸誘戦陣訓の暗記を確かめたり、また通信が無線ならかわりがあり、立川の陸軍航空技術研究所にも出張、専門分野であると胸を躍らせ何もわからぬまま軍隊に憧れたものです。

固い決意で入隊して二ヶ月余り一生懸命でしたが、日が経つに従つて常識の通じない軍隊の異常に度々接し、幼い頃から描いていた美しい皇軍の姿が見られず、みにくい体質が目止まる様になつて、これで良いのだろうかと思ふ複雑な気持ちになつたものです。

米軍の沖縄への上陸、そしてあの激戦を知るすべはありません。行く先が示されない出勤命令が出たのが丁度この頃で、真夜中に完全武装して營門を出る大部隊の一員となつて身の引き締まる思いでした。対空装備をした列車に乗り早朝下車したのは岐阜駅で、かなり歩き有里村と言う所に駐屯、近くの各寺院に分散し宿泊、先に来ていた

部隊を支援、特攻の飛行場建設に従事どうしてわかるかと思う処ですが此にも米軍の偵察機が何回か飛来しました。エンジン音が聞こえたとすぐ身をかくし、滑走路には大きな盆栽の様な移動出来る樹木を並べていましたので、探知する事なく遠くを旋回して去つて行きました。

僅か一ヶ月余りの期間でしたが、此で民家に入浴のお世話になつた時が最もくつろぎ心の安まる時間でした。豊かな人のすばらしい事、美しい事を胸に刻んだ機会でもありました。

元の連隊に帰つて見ますと浜松市街は艦砲射撃を受けたと言われ全滅、大丈夫と思つていた原隊も空襲を受けて通信講堂始め各施設はむざむざな姿でした。まもなく福島県郡山市へ移動、そして次は宇都宮へ転進、終戦を迎えたのは此の飛行場で当日は車で燃料置場を巡回、途中、出撃態勢の零式(改良型)戦闘機を目にしました。被弾して無数の小さい穴が見られるものがありました。健在です。

飛行場には敵をあげむくべニヤで作つた飛行機が擬装して置いてあります

が、出撃出来るものは総て遠待壕か、遠く離れた雑木林の中に擬装をほどこして、空から見つけられない状態で止めてあります。

帰る途中民間の方から敗戦を話しかけられました。が、デマとして一蹴、様子がいつもと違ふと感じましたが、そんな事はあり得ないと思つていました。これが打ち消されたのは連隊長からの訓示で「おそれ多くも天皇陛下におかせられては本日正午、おんみずから戦争終結の命を下された」と言う伝達です。総ての書類を焼却、銃を含むあらゆる火器を一ヶ所に集結、残務要員を残して、第一航空軍指令官の命令で部隊が解散したのが八月十五日午後六時過ぎでした。階級章を取り外して組織を解かれた集団が二十数キロ向こうの駅へ歩く姿は異様で、連隊から遠ざかり兵舎が見えなくなると、上官を殴つて仕返しをしようと言う声が聞こえます。かつて隊内で受けた仕打ちを晴らすため、暴力で名の通つた上官を待ち伏せして仕返しをしようとする集団があちこちに見られます。やがて身に付けた装備を川や山に捨てる者も次々と

出る様になりました。

島根出身者が数名いましたが、民間の方から米軍が東京へ上陸すると言う知らせがあつて、北陸線經由で還る話しをしていました。私は同調出来ず東京へ出ましたが進駐軍の姿は見ませんでした。

すしづめの混合列車や貨車を何回も乗り継ぎ黒松駅に着いた時は日が落ち真っ暗で、月の光りに助けられて山越えをし園道に出て歩き続けて家に着いたのは真夜中でした。

翌朝、村役場に帰還を報告、上官に接する様に敬礼して不動の姿勢で話をした事を記憶しています。早く帰ったからでしょうか逃亡して還ったと言う人もあつた様で、かなりの間嫌な思いをしました。

やがて当時の様子が明らかにになり、マッカーサーが厚木に上陸するに当り最も恐れたのが不穏な動きと共に、出撃出来る戦闘機をかなり持っている航空隊の存在で、これの排除を日本に強く要求、航空隊の解体を真っ先に指示した事が伝わりました。

防毒マスク等々持って帰った装備は

二十数年後、私も参加して結成した「戦争を語りつくす会」に寄贈。身に付けていた日の丸に神風と染めてある千人針は、明石師範・神戸の親和・野田・山手各校の学徒が寒い季節に作り、渡してくれたもので貴重、大切に保管していましたが空襲で多くの学徒報国員が犠牲となり、その中に先頭に立って一針一針を呼びかけてくれた、仲良しグループの幾人かがいますので、彼女等の霊が安らかにとこれも寄贈。

寄贈したものは毎年開戦の十二月八日「戦争を語りつくす会」の人々により展示、平和を訴え続けていると聞いています。

私達があの戦争を通じて学ばなくてはならない事は、歴史の事実を正確に受け止め、そして教訓を引き出し、これを自らの姿勢に留める努力ではないかと思ひます。あの戦争が侵略戦争であつたと受け止める事が出来たのみならず、歴史を日本の立場からのみとらえ、それを基準にした物指で総てを計っていた事を知らされたからです。帝国主義の定義、知る事の出来なかつた分野の政治と経済、戦争と倫理を

学ぶ機会があつたからと思ひます。知る自由は民主主義にとつては欠かす事の出来ない条件で事実誤認を防ぐだけでなく、物事を一面的に受け止める弊害をも改めるものでしょう。

戦後「自由平等」という言葉をよく耳にしましたが、この二つの言葉は互いに相反する立場に立つ概念でこの矛盾する二つが、統一した型で受け止められ「自由平等」と語り継がれて来ているのは、二つのそれぞれの不十分さを乗り越えた新しいものの発見を人の世に期待しようとするからでないでしょうか。民主政治が衆愚政治といわれた事がありますが、これはその動向が構成する組織の人格に左右される点を指摘したもので、政治を含むあらゆる事柄が一人一人の人格の総和、反映として現れる点に思いを寄せ、よく見考えてどうしなければならぬかを常に追求する姿勢が大切と思ひます。



「書き初め大会への作品募集」

大代公民館

お正月に公民館で書き初め大会を開催致します。題材と様式は自由で、どなたでも応募できます。振るってご応募下さい。

提出〆切日 一月十六日(火)
展示日 一月十七日～三十一日

「役員改選のお知らせ」

民生・児童委員総務としてご精励下さいました田辺幸子さんがこの度、任期満了に伴い、ご勇退され、三名の児童・民生委員の方々は井谷英美さん・柿丸清春さん・今田文子さんです。皆さんのご理解ご協力をお願い致します。

「大代町福祉委員役員交替」

この度大田市各町ふれ合い福祉委員の任期満了に伴い改選がありました。大代町の福祉委員は次の方々です。

(敬称を略させていただきます)

上市 後藤マサエ 下市 田辺幸子

- 植松 窪田 忠 四日市谷口陽子
 - 椿 花田時子 川上 鈿せつ子
 - 下谷 船木佐津江 八反田 高村真
 - 本郷 横 明完 山田 武田充江
 - 平 笹木光夫 下飯谷高村玲子
 - 右原 渡利マサ子 植松 渡 吉正
- 皆さんのご理解ご協力をよろしくお願い致します。

*** 十二月の行事予定 ***

◆5日(火) 編集委員会

◆10日(日) 福祉弁当

◆12日(火) 正月〆縄作り教室

◆13日(水) 福祉委員会

◆14日(木) 正月料理教室

◆15日(金) 運営委員会

◆22日(金) 連合自治会

平成八年一月行事予定

◆1日(月) 元旦マラソン

朝六時から 集合場所は石清水八幡宮前 皆さん走ってみませんか。

◆1日(月) 新年挨拶交換会

午前十時から 公民館にて



会費 二百円 (当日)
皆さんの参加をお待ちしております。

★ー★ おしらせ ★ー★

◆大代公民館から

大代婦人会様より

先日、公民館へ金一封の御厚志を頂きました。厚く御礼申し上げます。



◆社協大代支部から

先日の大代町文化祭に於てご協力頂きました共同募金の街頭募金は全部で一八、二八七円でした。

皆さんのご厚意に対し厚く御礼申し上げます。市社協へ送らせて頂きました。

下飯谷 飯田須美子様より

上市 松島良範 様より

香典返しに替えて金一封の御厚志を頂きました。厚く御礼申し上げます。

※今年もあと僅かになりました。

皆さん健康に気をつけてよいお年をお迎え下さい。